



たいしも通信

まずはじめに、この「たいしも通信」についてのお知らせです。こう書くと、ネタも尽きただろうし、ついに廃刊か？と思われる方もあるかもしれませんが、まだまだがんばりますので、もうしばらくお付き合い下さい。お知らせする内容は、これまで郵送で新聞をお送りしていた会員様にも、この「たいしも通信」が同封されることになったことと、山口県隊友会HP中の「支部だより」にて本誌が掲載されるようになったことです。調子に乗ったついでに、今後は過去のバックナンバーも掲載してもらうよう調整するつもりです。

下関戦跡シリーズ9回目、今回は広義での戦跡(こじつけがだいぶ苦しい!!)、下関市と皇室についてを前・後編の2回に分けてお送りします。皇室というところ、どうしても関東のイメージがありますが、もちろん下関とも深くかかわっています。今回の前編では特に壇ノ浦の戦い、つまり安徳天皇にスポットを当てます。

◆壇ノ浦の戦い

下関市と皇室の関係で最も有名なのが元暦2年/寿永4年(1183年)の壇ノ浦の戦いにおける、当時わずか8歳(数え年/満年齢は6歳4か月)であった安徳天皇の入水でしょう。実は密かに生き延びていた、などの伝説は日本各地に存在しますが、とりあえず下関に関係があるものをピックアップします。

◆御旅所

壇ノ浦の戦いの翌日、漁師が網にかかった御尊骸を引き上げて、一時的に安置した、という御旅所(おたびしよ)があります。御旅所とは本来、旅の途中で高貴な方が休憩される場所の事です。正式な名称は「赤間神宮小門御旅所(安徳天皇殞斂地(ひん

れんち)」。殞(ひん、もがり)とは遺体を納棺して仮安置し、別れを惜しみ、死者の靈魂を畏れ、かつ慰め、死者の復活を願いつつ、遺体の腐敗・白骨化などの物理的変化を確認することにより、死者の最終的な「死」を確認する儀式のことです。斂(れん)とは死体を棺に収めることを意味します。場所は市内伊崎町で、ここには赤い鳥居と石碑が建っています。

◆陵

陵(みささぎ)とは天皇や皇后の墓のことと、宮内庁により市内阿弥陀町にある阿彌陀寺陵(あみだじのみささぎ)に治定されていますが、明治時代の廃仏毀釈運動により阿彌陀寺は廃され、現在の安徳天皇を祀る赤間神宮境内となりました。

◆御陵墓参考地

これまでの説とは別に、海中から確保した御遺骸を運ぶ途中、豊田湖あたりで(牛車)全く動かなくなったため、その周辺の適地に葬ったという伝説があり、「安徳天皇西市御陵墓参考地(王居止御陵)」として宮内庁により指定され、市内豊田町地吉にあり、石碑と古墳があります。この参考地というのが曲者で、指定された安徳天皇のもでも全国に5か所ほど存在しています。

しかし個人的には三種の神器の一部を見つけれなかった義経が、隠蔽目的でこちらに埋葬して朝廷に対しては(当初)安徳天皇は消息不明である、と報告していたのではという理由から、こちらが最も有力かなと思ったりもしています。

◆編集後記

現職時、那覇と小月で天皇・皇后両陛下の車列に対し、一般道路上でと列をさせていただいた際、自衛官しかいない場所で、両陛下が車窓を開け手を振っていたのをよく覚えていました。例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。



たいしも通信

下関戦跡シリーズ10回目、下関市と皇室についての後編です。前編では壇ノ浦の戦い、つまり安徳天皇にスポットを当てました。今回の後編ではさらに前後の時系列において下関のトピックとなる仲哀天皇及び明治天皇のお話しをします。

◆仲哀天皇

仲哀天皇とは古事記・日本書紀に記されている第14代天皇で、日本武尊を父に持つとされています。

壇ノ浦の戦いの985年前、熊襲(現在の九州南部に本拠地を構え、大和王権に抵抗したとされる人々のこと)討伐のため、筑紫(現在の福岡県のうち、北九州市などのある東側地域を除いた部分)に赴いた仲哀天皇が突然崩御され、ご遺体は関門海峡を渡り「穴戸(穴門とも書く。長門国のこと)で本市を含む現在の山口県西部及び北部)の豊浦宮(現在の忌宮神社及びその周辺)」で殯され、長府侍町の日頼寺に「仲哀天皇御殯斂地」の塚と石碑があり、現在この地は宮内庁管轄となっています。「殯する」とはご遺体を仮安置することでした。仮とはいえなぜ下関に、と疑問を持たれる方も多いと思いますが、当時、天皇が九州の熊襲平定のために皇居豊浦宮を興し、7年間この地で政治を行われたということです。

日頼寺は元々極楽寺と呼ばれていましたが、後年、毛利元就の四男元清が、父元就の法号にちなみ「日頼寺」と改称し、菩提寺としました。

数方庭祭で有名な忌宮神社ですが、本来は仲哀天皇の他にその妃である神功皇后、さらには応神天皇を祀る神殿の三殿別立となっていました。火災により全て忌宮に合祀され現在に至ります。またその由来は次のように記載されています。

『第十四代仲哀天皇は、九州の熊襲の叛乱を平定のためご西下、ここ穴門(長門)豊浦(長府)に仮の皇居を興されたが仲哀天皇七年旧暦の七月七日に朝鮮半島の新羅国の塵輪が熊襲を煽動し豊浦宮に攻め寄せた。(中略)天皇は(中略)御自ら弓矢をとって塵輪を見事に射倒された、(中略)皇軍は歓喜のあまり矛をかざし旗を振りながら塵輪の屍のまわりを踊りまわったのが数方庭の起源と伝えられ(後略)』とあります。ところで、忌の漢字は何だか悪い意味のイメージがありますが、本来は「神に対して身を清め穢れを避けて慎むこと」とあり、特に平安時代以前は「齋」と同意語であり、悪い意味ではないようです。

◆明治天皇

明治5年(1872年)に明治天皇が西日本を巡幸(天皇が居所から外出されることで、単一目的の場合行幸、目的が複数ある場合が巡幸)されました。明治天皇初となるこの巡幸は、5月に東京を出発し、伊勢・京都・大阪・下関・長崎・熊本・鹿児島を周り、7月に東京に戻るという2か月の行程で、西郷隆盛が同行しています。そして同年6月に巡幸中の明治天皇が海路で下関に上陸、3泊されました。

これを記念して皇紀2600年(1940年)に「明治天皇御上陸地聖蹟」の石塔が建立されました。場所は市内南部町、国道9号線海側あるかぼーとの「水のひろば」横です。

◆編集後記

万世一系の…とはいえ、日本武尊までくるとさすがに神話的色彩が濃くなってきましたが、自分はその当時生起した大きなイベントを象徴的に表している、と捉えています。それよりもこれらの遺跡等が風化していくことの方が心配です。

例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。